

【霊に教えられた言葉】

▼2003年7月4日号の『教団新報』『荒野の声』に、こんなコラムを書きました。短いコラムですので、全部引用します。

▼我が家に子犬がやってきた。初めての経験でトイレのしつけ方も分からない。▼「犬は何故人間になつたのか」からはじめて、「犬の気持ちが分かる本」ついに「犬の言葉を理解する」という本を読んだ。▼語彙が少ないから英語よりは楽と考えたのが甘かった。単語が少ない分、一語一語が状況に応じて多様な意味を持つ。真反対になる場合もあるから要注意。▼結局、犬の言葉を理解すれば犬の気持ちが分かるのではなく、犬の気持ちが分かると犬の言葉を理解できる。そういうことだ。▼ひるがえってみれば、人間だって同じことだ。「ばか」という単語が状況設定に対応してどれ程沢山の意味を持つか。▼互いにここを通わせ合うためにある筈の言葉が、長い年月をかけて、バベルの塔のように積み重ねられ、何の意味も持たないばかりか、却って混乱を生む。そんな愚かな対話をするのは人間だけだ。言葉は武器ではなく、愛を伝えるすべだ。

▼13年後、本にする時に、こんなメモを書き加えました。… この犬は老犬の域に入ったが、元気だ。寡黙ながら雄弁に語る。大抵一言で用を済ませる。ワン。

▼このコラムを書いた時には、特に一コリントを意識してはいなかったかも知れません。しかし、丁度同じ頃、一コリントの説教をしていましたから、これを下敷きにして、コラムを書いたのかも知れません。何しろ、13年前ですからはっきりとはしません。

▼このコラムの結論は、言葉が分かれば、気持ちが分かる、それは否定できないが、むしろ、気持ちが分かれば、言葉が分かる、ここにこそ真理がある、ということです。

そして、そのまま、一コリント 2 章 11 節以下の結論でもあります。

▼11節。

『人の内にある霊以外に、いったいだれが、人のことを知るでしょうか。

同じように、神の霊以外に神のことを知る者はいません。』

神さまのことを知るには、聖霊の言葉によるしかありません。人間の言葉ではどうしても表現しきれないものが残ります。人間の言葉を、人間の理性と言っても同じことでしょう。神さまのことを知るには、人間の理性ではどうしても表現しきれないものが残ります。神さまのことを知るには、人間の感情ではどうしても表現しきれないものが残ります。

▼聖霊の言葉、聖霊語と言い換えることもできますでしょう。つまりは信仰があればということです。

神学的説明を聞いて納得し、信仰の道に入る人がいるということを否定はできません。しかし、普通は逆でしょう。信仰の道に入ることで、難しい神学的説明も理解出来るようになるということです。

▼同様に、12節。

『わたしたちは、世の霊ではなく、神からの霊を受けました。

それでわたしたちは、

神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです。』

『世の霊』、これを合理的思考とか哲学とか、実証とかと言い換えても同じことでしょう。合理的思考とか哲学とか、実証とかで、神さまの存在を知ることでもまして証明することもできません。人間の経験も、修行も同じことです。

『神からの霊を受け』ることによってしか、『神から恵みとして与えられたものを知るように』なることはできません。

▼13節。

『そして、わたしたちがこれについて語るのも、人の知恵に教えられた言葉によるのではなく、“霊”に教えられた言葉によっています。

つまり、霊的なものによって霊的なことを説明するのです』。

11～12節は、聖霊によってのみ、神さまを知ることですが、13節は、人間が他の人に神さまのことを伝える、教える場合にも、矢張り、『“霊”に教えられた言葉に』よるしかない、『霊的なものによって』のみ、『霊的なことを説明する』と言われています。

ここでも、結局聖霊の言葉によらなければ、学ぶことも、教えることも出来ないということです。

▼私は苦手ですから、体験がありませんが、語学を学ぶには、語学漬けになるのが一番だそうです。全く本語が話せない所に放り込まれば、嫌でも、憶えるということです。だから、語学留学するし、帰国子女が圧倒的に有利なのでしょう。

文法も何も要らない、ただただ聞き、話す、これが一番だそうです。

▼さて、語学が苦手な私が語学の勉強法を論ずるつもりはありません。問題は、信仰のこと、教会のことです。

教会の中のことに、信仰のことに、私たちはあまりにも、この世の知恵を頼りとしています。この世の手順を、この世の道具を頼りとしています。

何しろ、この原稿もパソコンで記しています。コピー機で印刷します。ネットで配信します。

この世の知恵を、この世の手順を、この世の道具を頼りとしなければ何もできないような有様です。

しかし、本当に、パソコンがコピー機が、福音を伝えるかという話です。

▼脱線かも知れませんが、一つの例としてお話しします。この例は、例話の例で、聖霊の霊ではありません。かように、私たちは、福音を伝えるのにも、この世の言葉を借りなければなりません。

さて、脱線とはこのことではありません。

先週、階段昇降機が機能しませんでした。どうしてでしょう。機械の故障ではありません。これを動かす人がいなかったからです。階段昇降機が必要な時に、動かせる人がいなかったのです。

このことで教えられました。階段昇降機を動かすのは、機会ではありません。電気ではありません。結局人なのです。足が不自由で礼拝堂への階段を上れない人と、一緒に礼拝を守りたいという思いなのです。この思いがなければ、階段昇降機は動きません。

勿論、このことは、パソコンにもコピー機にも当て嵌まります。

▼14節。

『自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊によって初めて判断できるからです』。

13節に述べられていることを、裏返せば14節になります。

この世の知恵、力、経験によって生きている人には、福音の言葉はなかなか通じないのです。全く通じないかも知れません。

どうしても、聖霊の言葉に、教会の言葉に翻訳しなくてはなりません。

では、聖霊語の勉強会をしなくてはならないでしょうか。誰が、これをマスターしたいと考えるでしょうか。

昔はそんな人がいました。教会が文化や科学の面でも、教育でも福祉でも、この世をリードしていて、文化や科学、教育、福祉、音楽を学びたい人は、教会や聖書を知る必要がありました。少なくとも、必要だと考えられていました。

今は、この図式は通用しません。

▼さて、聖霊の言葉はどうしたら学ぶことができますでしょうか。学びたい人は、何とかして学ぶかも知れませんが、興味のない人には、どうやって伝えるのでしょうか。

矢張り聖霊によるしかありません。

▼今日はCのキャンプの後で、普段のように説教準備に時間をかけられませんでした。そこで、むしろこの機会に普段はしない例話でお話ししたいと考えます。

これは、次に出したいと思って、あらかじめ書き上げている本の、一部、一つの章です。

その中で一番短いものですので、全文、引用します。『極楽と天国』という題です。

▼Ⅰ. 随分古い話になるが、たまたま、ある教会の夕礼拝に出席した。直前のクリスマスに受洗した中年男性の証があった。

彼は、多年、日曜日毎に教会に通う妻と二人の娘を車で送迎していた。ある日、娘が言った。「お父さんはとてもいい人だから、きっと極楽に行けるね。でも、お母さんと私たちは天国に行くから別れ別れになってしまうね」。

この言葉がきっかけで、彼は送迎だけではなく、自分も礼拝に出るようになった。そして、遂に受洗に至った。これが、彼の証の内容だった。

Ⅱ. これは比較的最近の実話。70歳の妻が教会に通うのを快く思わない80歳の夫に、妻が言った。「あんた、私の方が長生きするんだからね。あんたが寝たきりになったら、無理矢理でも病床洗礼を受けさせるからね」。

夫は思った。「歳も若いし、女の方が長寿だから、これは本当になってしまうかも知れない。何も知らないままに、洗礼を受けさせられてはたまらない」。彼は、その時から、密かに聖書を読み始めた。やがて祈りの真似事をするようにもなった。妻には内緒で。

数年後、夫は体調を崩し、入院が長引いた。年末年始に仮退院した時に、果たして牧師がやって来た。これから洗礼式が始まるという。教会には二回ほど出ただけなのに。彼は抵抗したかったが、一方で、その時が来たかという諦めも感じた。

誓約の段となった。牧師は言う。「声が出なくとも、頷くだけでも大丈夫ですよ」。「あなたはイエスがキリストであると信じますか」。時間は一瞬。しかし、死に瀕した人間が体験するという、走馬燈で自分の人生を振り返る思いがした。

数日来会話が辛くなっていたのに、彼は、しっかりした声で答えた。「はい」。

受洗後、彼の病状は劇的に快復した。しかし、足腰が弱っており、礼拝に出席することは困難だった。

彼が、受洗後初めて教会に出たのは、妻の葬儀だった。

Ⅲ. 神学生をからかうことが趣味みたいな小学5～6年生のCSクラスがあった。毎日曜日のように、難問奇問を持ち出しては、神学生が困惑するのを楽しむ。それを競うものだから、神学生はたまったものではない。しかし、生徒たちとのやりとりは楽しみでもあった。彼の方で

も、生徒がにわかに答えられないような質問を考える。

「今ここに、あなたの目には見えない人が一人います。それは誰ですか」。

「幽霊」。

「幽霊は教会には来ないと思うよ」。

「神さま」。

「神さまは、人間ではないと思うよ」。

「でもイエスさまは人間だよ」。

神学生はしくじった。彼が用意した答は、自分自身だった。

「他の人のことは見えていても自分は見えないんだよ。鏡に映しても、左右が逆でしょう」。こういう哲学的問答に持って行くつもりだったのに、「イエスさまは神にして人間」という神学的土俵に引っ張られてしまい。彼は、敗北感を味わうしかなかった。

そのクラスに、まじめな性格で、神学生をからかったりしない女の子がいた。むしろ、神学生の味方をする。

彼女がぼつりと言った。

「先生、良いことをした人は天国に行くんでしょ。そして、悪いことをした人は、地獄に行くんですね。良いことも悪いこともしない人は、どこに行くんですか」。

神学生は、この子まで、意地悪な質問をするのかと戸惑った。そもそも、天国と地獄について、小学生相手に、どんな説明をすれば良いのか。

沈黙。

彼女が言った。

「先生、分かった。天国でも地獄でもなく、中国に行くんだ」。

彼女は大まじめだった。

▼16節。

『「だれが主の思いを知り、／主を教えるというのか。」

しかし、わたしたちはキリストの思いを抱いています』。

理屈ではありません。信仰をもって人と接し、この人のために祈り続ける、それ以外に伝道の術はありません。神さまを語るに、どんな人間の知恵を持ってしても、不完全どころか、マイナスになるかも知れません。伝える言葉は、愛の言葉であり、聖霊の言葉なのです。

逆に言えば、愛があれば、思いがあれば言葉は通じるのです。

人間は、犬とも話すことができます。他の動物とも話すことができます。猫はどうでしょうか。多分、猫とも話すことができます。愛があれば、思いがあれば言葉は通じるのです。愛がなければ、思いがなければ言葉は通じません。どんなに語学堪能であっても、愛がなければ、思いがなければ言葉は通じません。

▼今日の日課は、3章9節までです。後半は、ごく約めて説明致します。一言でお話しします。ワンではありません。

言葉を通じなくする力が働きます。これが、この世でも、教会でも蔓延ってしまっています。

要するに、肉の思いです。他の人を思うのではなくて、自分のことしか考えられない。他人の世話をする場合でも、奉仕をする場合でも、真に、他の人を思うのではなくて、自分のことしか考えられない。これがパウロが言う肉の思いです。

肉の思いは、人間と人間との対立を生みます。憎悪を生みます。言葉が通じなくなります。肉の思いに沈んでいる人の言葉は、暴力でしかありません。

こんな言葉は、神さまのことを伝えることはできません。それどころか、全く逆の働きをするでしょう。他の人を神さま嫌いに、教会嫌いにするでしょう。